

## 論文の和文要旨

論文の題目

マテリアル・ワールド  
——小川洋子作品における「もの」概念の比較研究——

氏名

今井メッシーナ ラウラ

本稿では、現代日本文学を代表する作家の一人である小川洋子を「もの」との関わりから考察する。これまで小川は、アンネ・フランクやフェティシズムなどとの関わりで論じられてきており、その中には当然「もの」がかかわらないわけではない。しかし、「もの」から小川洋子の文学を分析した論考は管見のおよぶ限りはなされていない。本稿は、これまで論じられてきた作家とアンネ・フランクとの関わりや記憶といった主題を「もの」の側から捉え直すことを目的とする。

序論では、小川の作品に繰り返しあらわれるライトモチーフを、作家としての彼女が自己確立をするのに重要な役割を果たしたアンネ・フランクとの関わりから俯瞰する。そこでは、反復と懐旧的な既視感に彩られ継続してあらわれる主題を通して小川文学の大枠を捉え、本稿の中で何度も言及することになる、本物と複製、真正性の二次的重要性について議論の端緒を開く。

第1章では、以降の論考で必要となる理論的背景を認識する際に有用である、美術館や展示などの背後にある日常 (*infra-ordinaire*) やフェティシズム、情熱の結晶を事例別に概観していく。「見る」——それはものごとを自然に腑分けし、細部に注目する傾向がある——という行為の、また「ガラス」——それは視覚的に感知可能な仕方で物理的隔離を可能とする——という素材の分析を通して、愛のテーマを断片的に、また、「もの」に象徴的な価値を置き、部分を全体以上に重要視してしまう蒐集家の強迫観念を取り扱う。ヴァージニア・ウルフの短編作品「堅固な対象」、オルハン・パムクの小説『無垢の博物館』と彼が設立した同名の博物館のカタログ *The Innocence of Objects* の分析は、文学が蒐集家と彼を取り巻く「もの」の世界の関係と、彼が人生を通して感じる不安や苦痛を説明する対照的な事例となる。前者が強迫観念を蒐集家が社会全体から切り離されるものとして分析する一方、後者はその同一の感情が現実世界に流れ込む文学的装置となりうることを証明している。

第2章の目的は、小川洋子の作品を「記憶」と「もの」の関係から読み解くことにある。具体的には、ギリシア神話を中心に西洋的伝統における「記憶」の概念を整理したのち、それらの関係がもっとも顕著に現れている「密やかな結晶」と「沈黙博物館」の二作品を現代思想や比較文学の知見を参考にしつつ、分析していく。はじめに、西洋における「記憶」の概念をギリシア神話にさかのぼって検討する。古代ギリシアにおいて記憶を象徴

する女神ムネーモシュネーは、その系譜において、「文芸」や「美」、「時間」と深い繋がりも持つ。また、後の時代では、記憶はこの世とあの世を結ぶ鍵とも考えられるようになった。さらに記憶は――忘却を媒介として――「もの」とも親密な関係を持っている。ところで、小川の作品には、奇妙な博物館や私的なコレクション、変わったものを蒐集している普通の人々、形がないものの標本といったモチーフがしばしば扱われるが、これらは記憶とどのような関係を持つのであろうか。「密やかな結晶」では、忘却が人間にもたらす影響の大きさが描かれている。この作品は、住民の記憶からもの定期的に消えてゆく奇妙な島が舞台で、そこでは忘れることができない者は秘密警察に処罰される――そしてホロコーストとの関連を強く示唆する――という話であるが、消えるのはものに留まらず、身体もその対象となる。身体の一部を無くした人間は、それを持っていた記憶もなくしていくが、それは過去を失うに等しい。過去を忘れた者は自身の記憶を現在に語り継ぐことはできなくなるのである。「沈黙博物館」の底流に流れている主題の一つは、亡くなった人はどのように記憶されるか、という点である。こちらは、ある老婆が死を代表するものを収集・展示する博物館を設立する物語であるが、故人を語るができるのが他でもない「もの」なのである。これらの作品の独創性を際立たせているのは、形のないものにいかに形を与えるか、また、失われたものをいかに取り戻し、記憶の代替物へと変化させるかという課題に、文学をもって応えている点にある。そこにおいて重要な役割を担っているのが記憶と深く結びついた「もの」であり、この「もの」が有している語る力こそが記憶を、そして現在をも形作っているのである。

第3章では、いかに様々な要素が小川の作品をおとぎ話分析と関連付けられうるかを指摘している。小川は、身近なものが超自然的な力を持つこと、変わった博物館、「普通」の人々が「普通でない」ものや奇妙な標本を集めていることなどが彼女の作品において扱われていることからわかる通り、「もの」に並々ならぬ興味を示している。本章では、靴とタイプライターという、「薬指の標本」と「密やかな結晶」のそれぞれにおいて特別な機能を担わされている二つの「もの」に焦点を当てる。前者の「もの」はアンデルセンの童話「赤い靴」との関連において重要であり、両者の差異と接点について論考する。ここでは、すでに指摘されている青髭的サドマゾの主題が、標本技術士の弟子丸が彼の秘書に与えた一組の靴によって具現化されているか、また、それらが増大する強迫観念および二人の密室的恋愛関係の象徴に転じていく様子が論じられるであろう。物語の最後に近づくにつれ、主人公の女性は曖昧な繋がりによる束縛を一層強く感じるようになり、靴がぴったりと彼女の足に貼りつき、決して脱ぐことができなくなっていく。後者のタイプライターも、小川の作品においてフェティシスト的な位置づけを与えられている「もの」である。「密やかな結晶」の中で、それは女性の主人公と彼女の先生との間の愛を媒介する役割を割り当てられている。しかしながら、関係が進むにつれ、彼女は青髭の恋人によって故障したタイプライターだらけの部屋に幽閉されたこと、そして彼女の人生がタイプライターの存在に深く結びつけられてしまったためにそれが壊れたとき、彼女も

その中に消え、ほかのタイプライター、つまり彼の元恋人たちと一緒に打ち捨てられることに気づくのである。これらの小説とアンデルセンの「赤い靴」との比較を通じて、小川作品における不思議な力を持った「もの」の重要性に新たな光を当てられるであろう。さらに、マルセル・モースによる人類学上の功績の助力を得て、「もの」を贈る側と受け取る側との間の苦悩に満ちた関係についても言及できるであろう。「薬指の標本」において中心に置かれているのは、標本の対象となるものが現実に存在するかどうかではなく、記憶の蒐集である。弟子丸の研究所では、非物質的である記憶が「もの」に、あるいは有形物が無形物へと置き換えられ、愛や悲しみなど通常集められえないものが蒐集されていく。物体と人々との弁証法的で複雑な関係の容器としての「もの」をめぐる考え方は、小川の作品においては奇妙な、とりわけ物理的に存在しない「もの」の蒐集としばしば関連付けられて表象される。レーモ・ボディを含む多くの研究者が指摘するように、グローバル化と消費主義と向き合うためには、これらの複雑に絡み合った関係を突き止め、失われた意味を「もの」に還元する能力を発展させることが肝要である。その一方で、「もの」を日常世界への統合が通常功利主義的アプローチによって価値づけられていることは本質的ではない。かつてフェルナンド・ペソアは「なぜ芸術は美しいのか？役に立たないからだ。なぜ実生活は醜いのか？すべて目的、目論見、意図だからだ。」と書いた。本章では、小川の小説から出発して、日本と外国の作家が存在しない「もの」に対してどのようにして形を与えていくのか、無価値な物体から人間の生活の本質を引き出しているか、比較文学的な観点から論考を行うと同時に、彼女の文学を物質文化研究と結びつけることの意義を強調していく。さらに、付加価値としての中古品あるいは使用品の概念についても考察を行うとともに、ヴァルター・ベンヤミンのアーケードを援用して、「最果てアーケード」の中心主題となっている小さなアーケードを分析する。

第4章では、小川や存在しないものに形を与える目的を持ったほかの作家の作品を対象に考察する。存在しないと思われるものであっても、熱心な探求ののちに見つかる可能性はある。その意味において芸術は、それらを創り出そうという営みによって、多くのアイデアに満ちているといえる。本章は、「薬指の標本」で主人公が「もの」に転じていく様や「また明日」の主人公が自らの身体を捨てて知的能力を残したままイヤリングになることを受け入れること、前章で扱われた「密やかな結晶」や若い少年がチェスをする機械人形の中に入ってしまう「猫を抱いて象と泳ぐ」に焦点を当て、容器と中身、あるいは箱や引き出しについて論考を行っていく。また、石田徹也の作品にみられる人間の変容や慣用表現や文学的表現を具現化するクラフト・エヴィング商會の作品、さらにジョセフ・コーネルの代表作であるアッサンブラージュの箱など、形を持たないものや存在しないものに形を与えようとする芸術家や作家の活動や作品を分析していく。これらは、小川の「薬指の標本」とクラフト・エヴィング商會の『ないもの、あります』における慣用表現など「ありえないもの」の具体化に通底するアイデアでもある。とくに後者

は、慣用化によって失われる意味を、本来の「もの」の用法とつなげる試みであり、ブルーノ・ムナーリの「役に立たない機械」と通ずるものがあるであろう。

本稿では、様々な芸術家や作家、その作品を参照しながら小川洋子の作品にあらわれる「もの」を考察し、彼女の作品に立ち現れる「もの」が担わされている役割や、アンネ・フランクのモチーフ、奇妙なものを蒐集する人物、そして「もの」と人間との関係を分析してきた。その結果「もの」が、記憶の伝達や人々の関係を取り持ち、感情を結晶化など様々な側面で重要な役割を果たしていることが分かった。しかしながら、このような分析は小川の作品にのみ限られるわけではない。今後は、本稿での議論を下敷きにほかの作家や作品を対象に分析していきたい。